

文化財の継承保存について

The Succession and Conservation of Cultural Assets

冷泉 為人

Tamehito REIZEI

〈学術フロンティア推進事業〉における「文化財の継承保存」をテーマとする研究は最終年度の五年目になるが、その五年間に及ぶ結論として、次の四点が文化財を継承保存しようとする際の要諦になるという結論を得た。

①〈文化財の継承保存と種々の「力」〉

江戸時代の京都御所(禁裏御所・仙洞御所・大宮御所)は火災による焼失ごとに再建(八回の内、はじめ二回が造替、あと六回は焼失後の再建)されてきた。そのうち寛政度造営においては、古制すなわち平安時代の禁裏御所の建築様式であった公家の寝殿造様式に基づいて復興がなされた。このような再建がなされたのは裏松固禪の研究と、それを取り入れた松平定信の行政力による。ここから、大事業の復興には定信の行政力のように、指導力、構想力、知力、技術力、経済力などといった諸要素を象徴する「力」が必要であることは明らかである。

②〈文化財の継承保存と科学〉

報告者冷泉は京都御所の障壁画修復に、その調査員として現在まで十五年間にわたって関わってきている。今年度(2009年)は板絵(杉戸絵)の修復が行われている。ここで明らかになったことは、樹脂でもって板絵をコーティングして文化財を保護しようとしたが、それが逆に悪影響を与える結果になってしまったということである。具体的に言えば、長い年月の間に結露した水分と樹脂の成分が化学反応を起こして、シミのような白い斑点が板絵や板地に多数認められるようになってしまったのである。これらの新しい保護施策が昭和28年頃と、40年頃の二度にわたって行われたことは記録資料から明らかになっている。この保護施策は新しく保護法が制定された直後のもので、当時最善のものであると信じてその手法が用いられたのであろう。ところが30年後、40年後に、それが最善の施策ではなくむしろ結果的に文化財を傷める保存技法であったことがわかったのである。このことから、文化財の継承保存において新しい手法を用いると、それはまた「新しい課題」を生じることがあるともいえる。それを顕著に示すのが「高松塚古墳」「キトラ古墳」である。ところがはじめから悪影響を及ぼすことがわかっていたのであれば誰もその新しい文化財保護施策は行わないであろう。逆の言い方をすれば、善策と革新していたからこそ新しい保護技法を用いたのである。ただそれが予想外に悪い結果になってしまったということであり、ここからも学習すべきことがある。

③〈文化財の継承保存と修復基本方針(理念)〉

冷泉家住宅平成大修理においてその基本方針が大きな課題となった。それは冷泉家住宅が大正六年(1917)に北側に 10m ほど曳家した折に、広間などの増改築がなされたからである。現在、文化庁における文化財修復の方針では、文化財は原則としてその原初的形態に修復することになっている。そこで大正期の建物の増改築部分が問題となり、国の文化庁、京都府の文化財保護課、所有者の三者が 2、3 年議論を重ねた。その結果、増改築部分はそのままの状態解体修理を進めることになった。この方針は、建物にもそれぞれの歴史があり、その歴史の変遷も文化・文化財であるという考えから決定された。これもひとつの見識ではないだろうか。

④〈文化財の継承保存と教育〉

ユネスコの事務局長を 10 年間務められ、渋滞していたユネスコの組織を改革され、この度(2009 年)その任を退かれた松浦晃一郎氏の「テレビ映像」を見た。それは松浦氏のユネスコ改革の象徴的な〈世界文化遺産〉のことに種々様々に触れられていたものであった。その最後に〈教育が大事〉であることを力説されていた。氏の任期中で残念なことはタリバンによる「バーミヤン石窟仏の破壊」であり、その予告を聞いた時から直ちに種々に色々な方策を取ったが食い止めることはできなかったそうである。これと今ひとつはイラク戦争でのバグダッド博物館の文化財盗難事件が防げなかったことであり、これらは返す返すも残念なことであるとされる。ここから氏は、文化遺産・文化財の継承保存における、「読み・書き」という最低限の課題の克服をも含んだ教育の必要性・重要性を訴えておられた。

また、清水寺の森清範貫主によると、現在の梵鐘は昨年寄進された平成の梵鐘であるが、それ以前のもは「文明十年卯月十六日(1478 年 4 月 16 日)」の銘文が認められる梵鐘であった。旧梵鐘が鑄造された文明 10 年は京都が灰燼に帰した、応仁・文明の乱(1467-77)が終息した翌年であり、世の中が疲弊した中での鑄造であった。それが敢えて行われたのは、世の中の皆が平和を希求したからに他ならない。あるいはその梵鐘が平和への願いの象徴であったからではないだろうか。

いずれにしても、文化及び文化財の継承保存には、人材の育成や教育など色々な要素が必要であることは言うまでもない。そしてさらに文化財の継承保存の大前提は、世界が平和でなければならないということであり、戦争をしないということである。戦争は命を奪い、文化を破壊してしまう。つまり文化財を守るのも破壊するのも人間であるということである。